

## 第2章 ヒグマに係わる業務

### 2-1 出没対応専門員配置

業務期間中延べ190回の出没対応を実施し、区職員に対して専門的事項の助言を行った。対応した情報のうち、約3分の1がヒグマ以外の情報であった。こうした誤報は特にヒグマの出没が社会的に騒がれた9月以降に急増した。

ヒグマの情報であった場合には、痕跡等の発見に努め、出没している個体の特徴や出没状況の把握に努め、現地調査の情報精度の向上を図った。出没が継続する恐れがある場所については、パトロールを定期的実施したほか、自動撮影装置を設置して出没している個体の把握に努めた。その他、ヒグマの生態や痕跡の見分け方を学ぶ職員向けの研修会を実施し、職員の対応能力の向上を図った。

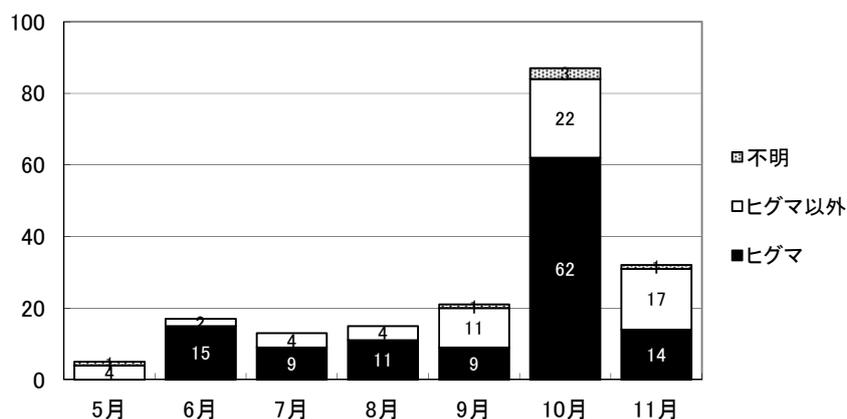


図 2-1 情報の内容別対応件数

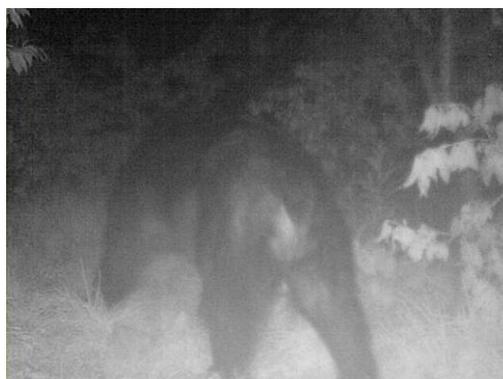


写真 2-1 自動撮影装置で撮影されたヒグマ

## 2-2 奥山地域広域痕跡調査

札幌市の豊平川源流部を中心に、計 33 箇所のヘアートラップを設置し、7 月下旬から 10 月まで定期的な見回りを行った。設置したヘアートラップ 33 箇所のうち 27 箇所でヒグマの被毛が採取された。また準備・撤収期間もあわせると、延べ 72 箇所、193 試料を回収した。被毛は 7 月下旬と 10 月に多く回収される傾向がみられた。

ヘアートラップの見回りとあわせて行った痕跡調査では、調査期間中にフン 163 個を含む 264 個の痕跡を発見した。走行距離 1km あたりの痕跡発見頻度は 0.160 個/km で、月別にみると 7 月が最も高かった (0.440 個/km)。9 月から 11 月は痕跡の発見頻度が大きく減少したが、ヘアートラップの結果は 10 月に高い回収率を示しており、ヒグマが奥山地域からいなくなったわけではないと考えられた。

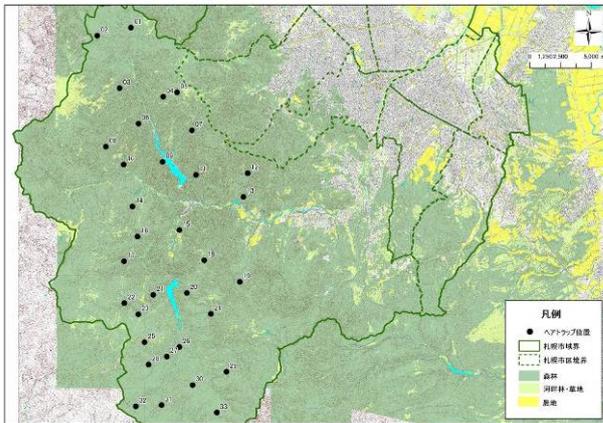


図 2-2 ヘアートラップ設置場所位置図



写真 2-2 回収された被毛

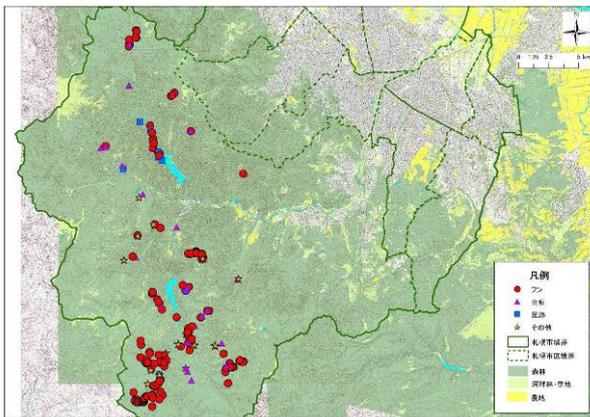


図 2-3 痕跡発見地点位置図

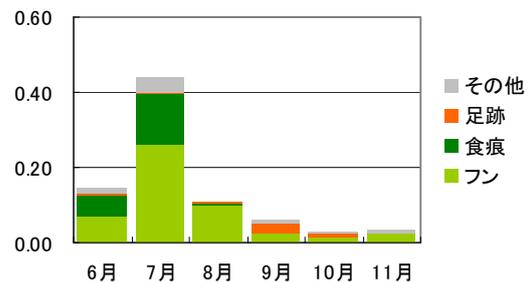


図 2-4 月別の走行距離 1km あたりの痕跡発見頻度

## 2-3 中間地出没調査

札幌市郊外の市民の森を中心に、10ヶ所の調査地を設定し、それぞれにヘアートラップと自動撮影装置を設置した。ヘアートラップからは延べ13地点から23試料が回収された。また自動撮影装置では3地点で延べ9枚のヒグマの写真が撮影された。

ヘアートラップの見回りとあわせて行った痕跡調査では、調査期間中にフンや足跡など34個の痕跡を発見し、踏査距離1kmあたりの痕跡発見頻度は0.105個/kmであった。これは同時に実施された奥山広域痕跡調査の結果(0.160個/km)に比べて、少ない値であった。

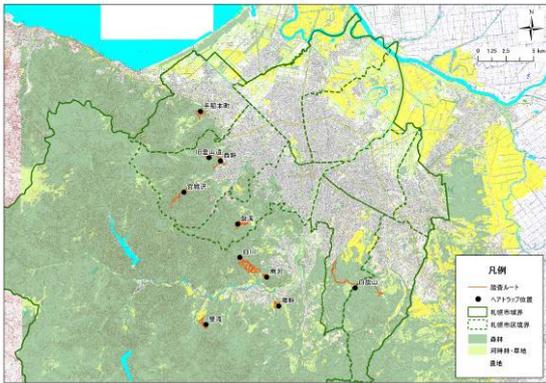


図 2-5 中間地出没調査 調査地位置図



写真 2-3 ヘアートラップ



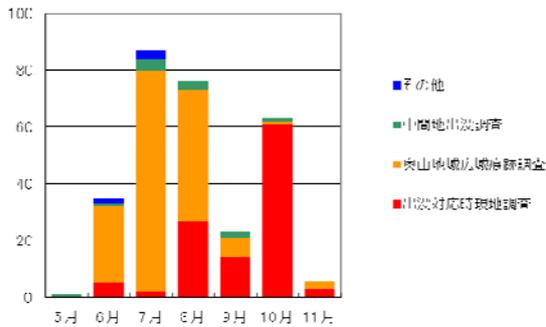
写真 2-4 自動撮影装置で撮影されたヒグマ

## 2-4 ファン分析

本事業の調査で回収した延べ 291 個のファンについて、その内容物を分析した。ファンの採取方法には時期によって偏りがあり、6月から8月前半は奥山地域広域痕跡調査の中で多く回収され、8月後半から11月にかけてはそのほとんどが出没対応時現地調査によって採取された。

全ての期間を通して草本が確認され、5月～8月の期間は種類別で最も高い含有率を示した。堅果類は9月および10月の試料に多く含まれ、ほとんどがオニグルミであった。漿果類は8月と9月はサルナシが多く、10月と11月はヤマブドウが多かった。

8月～11月の試料には、モモ、プルーン、プラム、スイートコーン、ナシ、リンゴなど多くの農作物が含まれていた。その他、10月から11月に採取された試料のうち、6個の試料からはビニール袋などの人為物が確認された。



2-6 月毎のファン採取状況

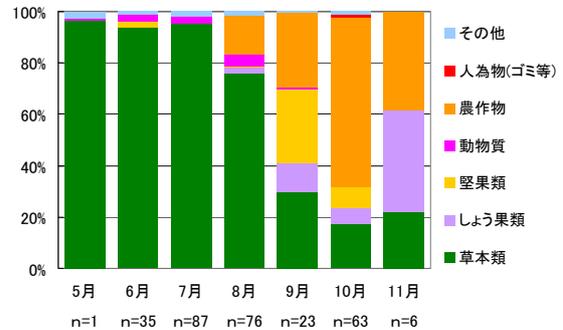


図 2-7 本事業で採取・分析したヒグマのファンの月別の内容物割合 (%)



写真 2-5 ファン内容物 左) 草本、アリ 右) ビニール袋等

## 2-5 DNA 分析

本事業で回収された被毛 285 試料と捕獲個体から回収された試料の分析から、オス 28 頭、メス 20 頭および性別不明 1 頭の全部で 49 頭が確認された。オスについては、定山湖周辺のヘアートラップで多く確認されたほか、南区の出没対応で採取した被毛からも多く検出された。メスについてはさっぽろ湖周辺で多く確認されたほか、中央区や手稲区の市街地近くでも確認された。

識別された個体のうち、オスの個体の一部で過去の分析結果と一致し、広い行動範囲の一端が明らかになった。また、複数の被害現場から採取された被毛が一致したことで、1 頭のヒグマが広い範囲で被害を引き起こしていたことが明らかになった。

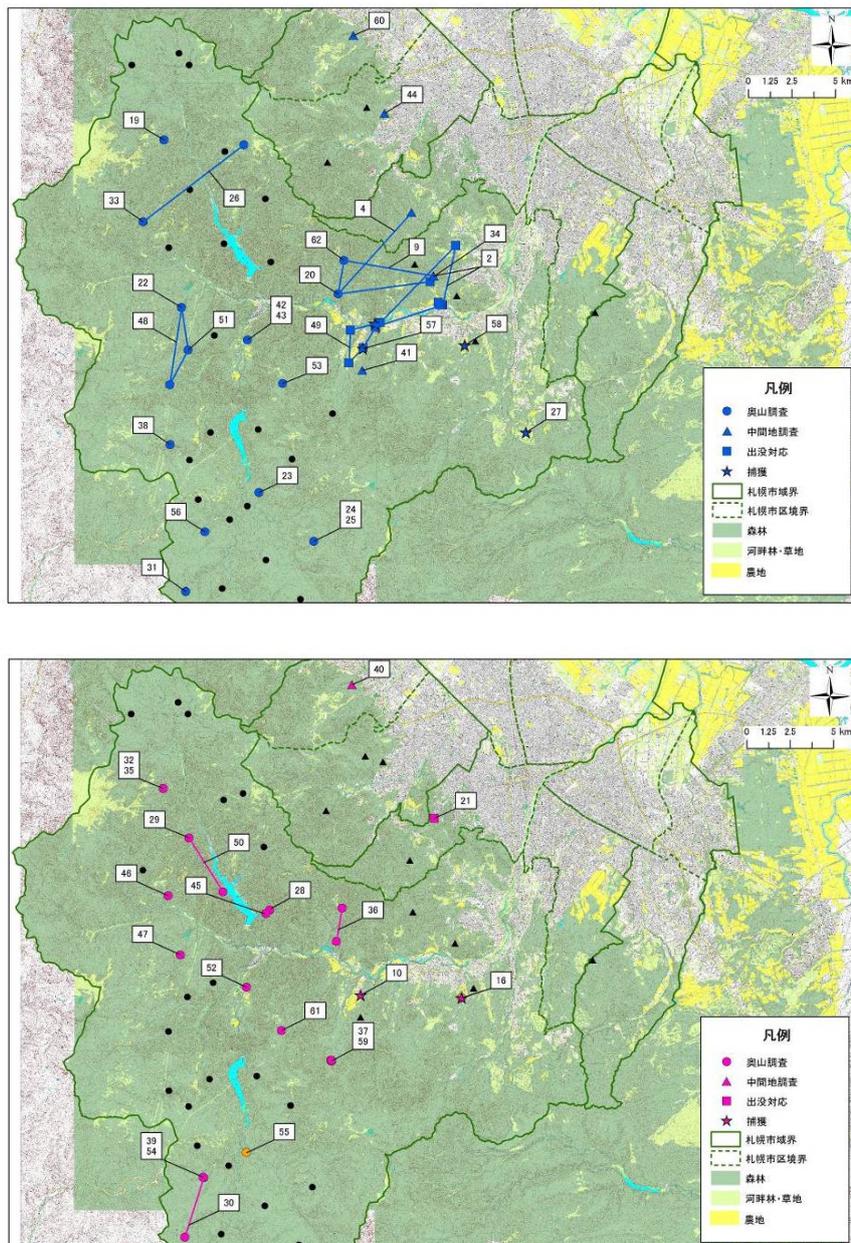


図 2-8 確認された試料の採取地点 上) オス 下) メスおよび性別不明

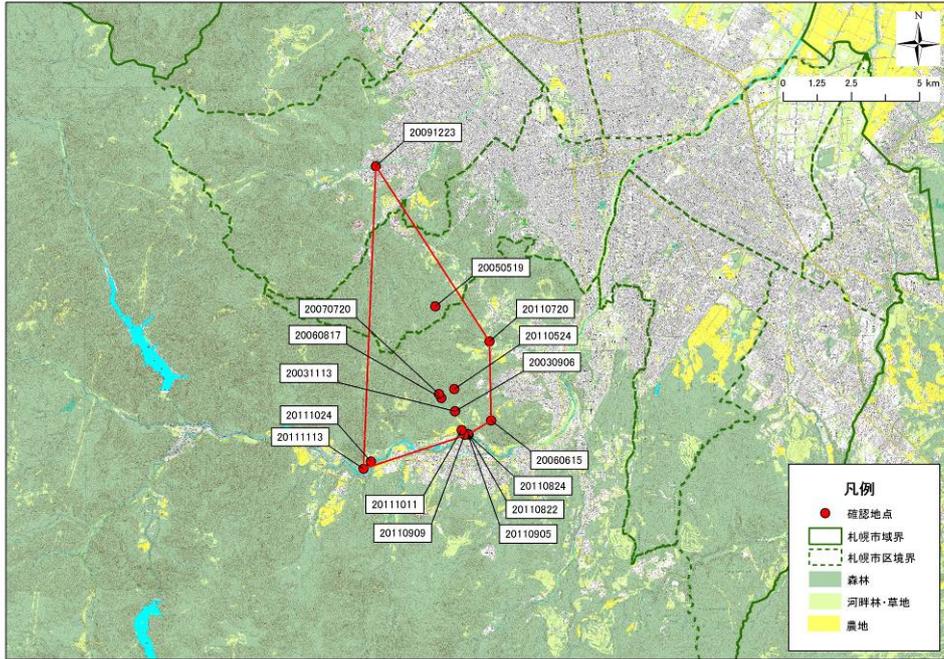


図 2-9 個体番号 2 (♂) の被毛採取地点と採取日

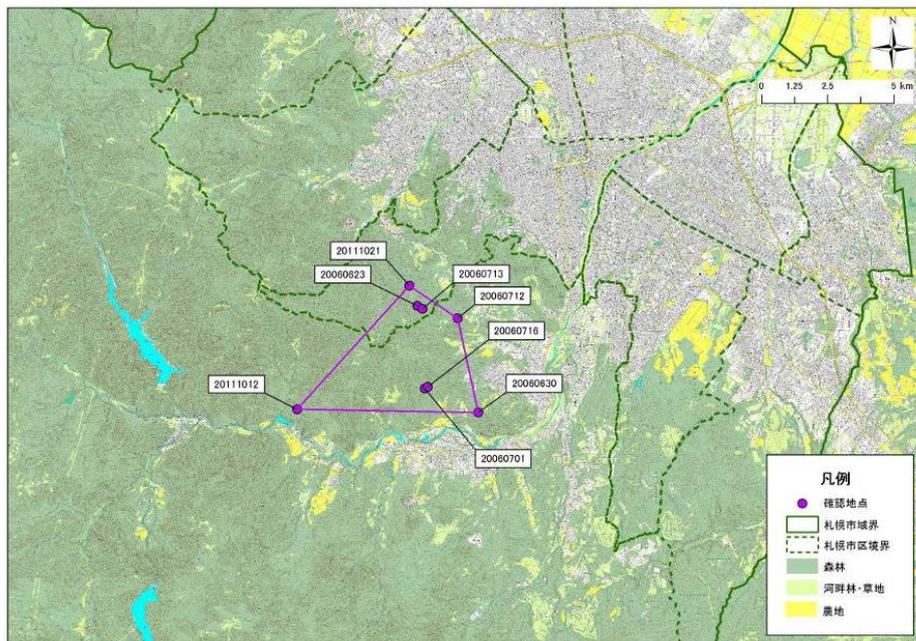


図 2-10 個体番号 4 (♂) の被毛採取地点と採取日

なお、DNA 分析による個体識別は、データの判読基準によって結果が若干異なることがあることから、ここで算出されている頭数は現段階の暫定値であり、細かな数字は若干変動する可能性が含まれている。